

平和を生きる

沖縄県立開邦高等学校二年 諸喜田 明佳

南風に吹かれながら故郷の街を見下ろす
澄み渡る大空の下
幾年もの時を重ねた街並み
穏やかな日々が静かに流れてゆく
灰色の建物の隙間から覗く戦禍の面影は
だんだんと色褪せる
遠くに広がる群青の海が
かつての悲惨な記憶を呑み込んでいく

赤瓦の屋根を太陽が照らしていた頃
自国の勝利を信じた若き兵士たちは
地獄と化したこの島へ降り立つ
尊いその両手には
武器を握ることだけが許された
大切な人と過ごすはずだった時間は
突然鳴り響いた爆撃の音とともに
二度と戻ることはなかった
先人たちが守り続けてきた故郷は
炎の中に消えてゆく

「ゆいまーる」
大切にしてきた琉球の精神は
いつしか失われ
昨日までの友でさえ敵となり
深い闇の中で孤独に苦しみ続けた

放課後 友と笑いながら帰った石畳の道
家族と囲む温かい食卓
今の私と変わらない日常がそこにはあった
誰かが始めた戦争がその全てを奪った
いつまでも続くと思われた平和は
音もなく消え去る
自然を愛し色彩に溢れていたこの島は
黒煙に覆われた戦場となり
流星群が輝いていた星空には
鉄の暴風が降り注いだ
いったい
この島の人々が何をしたのだろう

戦後八十一年という長い歳月が流れ
人々の記憶は少しずつ薄れてゆく
私は
響き渡る戦闘機の音で目を覚ます
かつて人々を震え上がらせたその音は
いつしか「あたりまえ」となってしまった
草陰に沈むガマの入り口
固く閉ざされた暗闇の奥底で
声にならない記憶が眠る
そして今日も
世界のどこかで平和な日常が崩れ落ちる音が
する
冷酷な世界に問う

「八十一一年の祈りでもまだ足りないのか。」

私たちは
平和な日々が崩れ去る恐ろしさを知らない
人を傷つけなければならぬ苦しみを知らない
けれど知っている

私たちにできる平和の守り方を
あの日を忘れないこと
戦争を繰り返してはならないと語り継ぐこと
この地球上でみんな繋がっている
これからは沖縄から世界へ

平和の輪を広げていこう
戦後から連綿と紡がれてきた祈りは
今を生きる私たちへ託された
たとえ戦争体験者たちの命の灯火が消えよう
とも

彼らの想いまで消えることはない
これから私たちが灯し続けてゆくのだ

命あふれるこの星で
誰もが平和な明日を失わぬように
永却の平和を希い私は生きる